



小西 収

指揮

# Ensemble Freund

.....  
アンサンブル・フロイント第4回演奏会  
.....

2002.7.6<sup>±</sup> 午後5:30開場  
午後6:00開演  
大阪フィルハーモニー会館ホール



## アンサンブル・フロイント「楽曲への共感に満ちた、瑞々しい演奏表現」

大阪の管弦楽団アンサンブル・フロイントとは・・・ほとんどが音高・音大卒でないアマチュアによる小編成の管弦楽団で、週一回の練習を行っている楽団である。

…これを読んで「なーんだ」と思って、この管弦楽団の技術レベルを断定し、自らその演奏への期待を失ってしまう、そんな方はいないだろうか。私は、そう考えてしまうような日本のクラシック音楽ファンや、音楽に親しんでいる人たちは、決して少数ではないのではないかとそう思わざるをえない。というのも、日本では演奏が、学歴・経歴やプロ並みの技術の高さのみで評価される傾向があると私は思うからである。

もちろんプロの高い技術は素晴らしい。しかし音楽はそれがすべてではないし、学歴や技術のみで演奏を判断することは、私は音楽の素晴らしさとは無関係のことのように思えてならない。

改めて。アンサンブル・フロイントは、指揮者小西収のもと、音楽的に優れた演奏をしている管弦楽団である。ここでは、音楽に深い理解と情熱を持ったプレイヤーが集まっており、コンサート・マスター中川幸治郎をはじめとして、ソリストとしても素晴らしい音楽性を持ったプレイヤーが決して少なくない。日頃から、モーツァルトやベートーヴェンの交響曲を中心としたレパートリーを丁寧に練習し、技術的な課題はもちろん、音楽性の向上に努めているのである。

それでは、アンサンブル・フロイントの演奏の魅力とはなんだろうか。それは楽曲への共感に満ちた、瑞々しい演奏表現である、と私は思う。楽曲の内容に純粋に共感しようとする姿勢がありながら、その響きには自然に感情がこもっているし、テンポや強弱などの表情には、いつも創意工夫があって凝り固まることがない。演奏表現が新鮮であり、聴き手の心に響き渡って来る、そんな魅力があると言えよう。

具体的にいうと、2001年1月20日に行われた、第3回演奏会でのオーケストラ編曲版バッハの「シャコンヌ」が、まず第一に挙げられるだろう。その演奏スタイルは、やや遅目のテンポで、踏み外しも大きな変化もない端正な造形で、じっくりと音楽を響かせていくというものであった。が、演奏の響きには深い想いが込められ、音符の一つ一つに血が通い、常に音楽が語りかけて聴き手の胸に迫り来るのである。あの瑞々しい、バッハの音楽に素直に帰依し

た響きの世界がもたらした深い感動は、どんなに技術の高いプロの演奏でもほとんど及ばないことを私は実感したが、例えていうなら、カール・リヒターのバッハ演奏に接した時にも似た、純粋な音楽（楽曲）への共感がこの演奏から感じられたのである。この「シャコンヌ」は、アンサンブル・フロイントの今までのすべての演奏の中で、突出したベスト演奏であると私は思っている。

次点としては、切々とした哀しみを唱い込めたモーツァルトの交響曲「第40番」も忘れたいが、今年の2月16日に行われたレコーディングにおけるベートーヴェンの交響曲「第7番」を挙げるのが順当ではないだろうか。

この交響曲「第7番」の演奏は、造形が今までのアンサンブル・フロイントの演奏の中でベストであり、指揮者の解釈がオケの瑞々しいうたや響きを見事に引き出した成功例だと言えるだろう。第一楽章の冒頭など、異常な速さで始まり、やがて突然全休止があるなど、いつもの指揮者小西収独特の造形術が盛り込まれているが、それぞれの表現のつながりが、今までよりずっと自然になり、造形が整った印象を受ける。さらに全体的にテンポ設定が今までの演奏よりも速めになった感じであり、オケがいきいきと唱い、特に第2楽章など、緩やかなテンポの部分の演奏の流れがずっと良くなり、演奏全体のまとまり、完成度が向上したと言えるだろう。つまり、アンサンブル・フロイント独特の、感情のこもった瑞々しい響きが、自然なメリハリのついた快い演奏の流れに乗って楽しめる、そんな魅力に溢れているのである。

この快い演奏の流れもまた、アンサンブル・フロイントの音楽の大きな魅力の一つだと言えるだろうし、本日のプログラム「運命」などでも、同様に自然なメリハリのついた快い演奏の流れが期待できるかもしれないだろう。

いや、そんな私の予想とはまったく別の演奏になるかもしれない。先述の通り、指揮者小西収の解釈は一つに凝り固まることなく、「シャコンヌ」と「第7番」もまったく私の予想していないスタイルの演奏ただだけに、本日の演奏もどうなるか断言するのは困難である。あとは、会場の皆さんがどんな演奏が展開されるかをそれぞれの耳で確かめられながら、ぜひ楽しみたて欲しいと思う。アンサンブル・フロイントの実演に接し、演奏表現の面白さや、感動などを感じられる方がまた増えるようであれば、本日のコンサートは成功であり、それは私にとっても大きな喜びである。

リコーダー奏者 山内 達郎



モーツァルト 交響曲第38番二長調K.504“プラハ”

第1楽章、緩徐楽章、終楽章の3つの楽章から成り、形式的な音楽になりがちなメヌエットが置かれないうことで、全曲を通じて引き締まった音楽を構成している。第1楽章冒頭は主音へ向かう3連音符によるユニゾン動機（「ジュピター」にも登場する）を伴って力強く始まる。映画『アマデウス』で、サリエリが作りかけの曲を演奏するのを途中で制止「ボクならこうする…」と言ってモーツァルトがピアノを弾き始めるシーンがあった。教科書的な和声がだらだらと続くサリエリの原曲をモーツァルトは一刀両断、変奏的即興を矢継ぎ早に弾きつないだ後、突如両手でオクターブユニゾンを挿入する。どんなパッセージかは覚えていないが、その瞬間の煌めくようなあざやかな印象だけは記憶から離れない。モーツァルトの「ユニゾンの力」である。対して、第1楽章展開部は、控えめに数えても5つの声部と10数回の転調を伴う、「ユニゾンの力」とは対極のめまぐるしい音楽である。それにしても、このように縦にも横にも多彩で複雑な音楽が（序奏を除くソナタ主部）全体の3割にも満たない時間の中に駆け抜け過ぎてゆくとは。この曲に限らず、モーツァルトの展開部はどれも短い…。さて、この、展開部の転調による表情の変化は続く2つの楽章にも息づいていて、特に終楽章のそれは、再現部開始後もまだ夢から覚めやらぬかのように明滅し、聴き手の心をどこか別の世界へ連れ去らんとするかのようだ。が、最後には型通りの結尾によってすっきりと終わる。幻想的情緒を最後まで持ち運ぶロマン派音楽とは質の異なる明るさ、現の生をもまた喜ばんとする明快さが清々しい。

ベートーヴェン 交響曲第5番八短調作品67

ベートーヴェン自身が第1楽章冒頭動機について「運命はこのように扉を叩く」と言ったとか言わないとか。「実話かどうかには拘らず、「運命」という呼称が半ば標題のように用いられるのは、それが作品の本質の一側面をよく表わしているからだ。」という解説が無難なところか。もう少し“通好み”に行くなら「運命」と呼ぶのは日本だけで、本場のドイツ、ヨーロッパではこの曲の曲名・呼称として「運命」の語を使うことはめったにないらしい。」となる。私の中でもこの作品は「運命」ではない。ただし、私の意識は本場主義・学術的趣味からは遠い。「本場」や「伝統」を重んじては、誰もとても今回のような演奏はできまい。逆に、主観的演奏を通じて作品に普遍的生命を与えたい、それには主観的自由を制限するような標題（めいたもの）を（少なくともいったん）脇に置こう、というのが私の考えである。そして、そういう演奏を多くの人に聴いて頂きたい

と思えばこそ、お知らせにはあえて“（あの）運命（をやります）”と載せることにしたのであった。

第1楽章には“悲しみの情熱”が渦巻く。冒頭動機は、涙の粒がフェルマータで凜になって落ちるように私には見える。第2主題は笑み、涙の滲む眼で浮かべる微笑みの表情である。

無口で静かな第2楽章。変奏される第1主題と変奏されない第2主題が交互に表れる。第1主題は雄弁であるよりは訥々としており、第2主題の管楽器による高らかな吹奏も、短く、すぐに静まって、どこかしら寡黙である。「心の晴れぬまま窓を見ると外は晴れていくぶん救われる」ような、“夕暮れの明度を持つ音楽”である。

第3楽章はベートーヴェン交響曲のスケルツォ中、第9のそれと並んで最高傑作ではないか。トリオを挟んで二重三重の反復を伴うスケルツォやメヌエットの楽章は作品もその演奏も形式美に偏りがちであるが、第5や第9で形式を超えた内容の濃さを感じるのは、“短調のドラマ性”に拠るのだろうか。第4楽章へと導く“音のドラマ”は特に普遍的な力を持つ。このような音楽がベートーヴェンの作曲前にはこの世に存在しなかったということがもはや想像できないほどである。スケッチ譜を見るときはまだまだ人為的過ぎてお世辞にも名曲にはなりそうにないのに、推敲という人為を重ねて逆にここまでの自然さ（普遍性）を得た、というところが不思議でもあり偉大でもある。そしてそれを受けて続くにふさわしい第4楽章。充実しきった音の大波が、清も濁も喜怒哀楽もすべて包み込み、押し寄せ進む。けれども、これだけ圧倒的でありながら、ベートーヴェンの書く音というのは、決して外面的には鳴り切らないようにできている。暗さなのか寂しさなのか、その“外に出ない”音、直に人間の内面へと向かう（「心より出で、心に至る」）音に、泣き出したくなるほどの魅力が溢れる。

誤解のないよう補足するが、「初めに（“悲しみ”“夕暮れ”などの）イメージありき」で音楽を作ってきたのではない。そういった、標題音楽に対するようなアプローチとは因果関係が逆で、ミクロにはアーティキュレーションの有無からマクロには楽章間の調性の相対関係まで、スコアを純音楽的に読み解いていくうちに、自分なりのイメージの方向が後から象られてきた、という方が近い。ただ、この曲ほど一定のイメージ（運命、苦悩、闘争、勝利、…）に固まった音楽もないのではないかと、そこに一石を投じたい、という思い・思惑を持ち続けてきたことも正直に告白しておく。が、単にアンチテーゼを示すことを目的とする態度ほど音楽をつまらなくするものはないだろう。作品にはあくまで、新しく、しかしおもしろくたくのしく深く、関わっていききたい。

曲 目

- ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト 作曲  
Wolfgang Amadeus Mozart (1756~1791)

交響曲第38番二長調K.504「プラハ」  
Symphonie Nr.38 D-dur K.504 "Prager"

第1楽章 アダージョ - アレグロ  
I. Adagio-Allegro

第2楽章 アンダンテ  
II. Andante

第3楽章 (フィナーレ)プレスト  
III. (Finale).Presto

… 休 憩 …

- ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン 作曲  
Ludwig van Beethoven (1770~1827)

交響曲第5番八短調作品67  
Symphonie Nr.5 C-moll op.67

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ  
I. Allegro con brio

第2楽章 アンダンテ・コン・モート  
II. Andante con moto

第3楽章 アレグロ  
III. Allegro

第4楽章 アレグロ  
IV. Allegro

Ensemble Freund

アンサンブル・フロイント第4回演奏会

[http://www.](http://www.ensemblefreund.de)